

若手の会

吉種 光[✉]

東京大学 大学院理学系研究科

若手研究者によるリレーエッセイということで、伊藤（浩）さん→伊藤（照）さん→池上さん→平野さん→遠藤さん→榎木さんをつないで、私の手元にバトンが届いた。執筆依頼のメールを見ても、過去のリレーエッセイを読んでも、本当に自由に好きなことを書いて良いようなので、若手の会についてこの約 10 年を振り返りつつ持論を述べたいと思う。

私が生物リズム研究をスタートしたのは、2002 年に卒業研究の配属生として深田研究室の門を叩いた時である。1997 年から 1998 年にかけて哺乳類の時計遺伝子が次々と発見され、転写翻訳を介したフィードバック制御の重要性が記述された。1999 年に大学に入学した私は、研究者としてどのような研究分野に進もうかと考え、人でも直感的に感じることができるよう高次機能に対して分子生物学的にアプローチしたいと漠然と考えるようになっていた。その時に出会ったのが時計遺伝子である。ホットなタイミングに導かれるように、深田研究室のある生物化学科に進学し、卒業研究生として配属されることとなった。その後の研究内容に関しては、昨年の学術奨励賞受賞者論文に詳しく記載したのでそちらを参照していただければ幸いだが、修士課程と博士課程を深田研究室で過ごし、2009 年に助教としてリズム研究を継続することとなった。研究者としての独立を意識して、今後どのようなキャリアパスを展開しようか、目の前の自分の研究や、研究室の学生指導、その他雑用と戦いながら、物思いにふける日々を過ごした。そのような悩みを抱えて参加した 2009 年の日本時間生物学会の年会において、同世代の伊藤浩史さんや西出真也さんに思いをぶつけると、みんなそれぞれ、少しずつ違う環境において、似たような悩みを抱えており、今の気持ちを誰かにぶつけないかという気持ちは共通していることがわかった。そして、今後のリズム研究について議論を重ね、同じ生物リズムを研究している若手の間で議論を交わす機会が定期的に必要だ、という結論になった。

年会が終わった後にも 3 人でメールを重ね、若手主催の研究会開催の可能性について構想を練り上げていった。その過程で時間生物学会のメーリングリストで有志を募り、初代世話人の 6 名（上記 3 名に加えて、中道範人さん、小川雪乃さん、小野ひろ子さん）が集結した。その後、幸運な事に日本時間生物学会の後援を頂き、2010 年の夏に千葉県の見見川にある東京大学の施設にて「生物リズム夏の学校」と名付けた合宿形式の研究会を開催する運びとなった。初めての大規模な研究会の主催ということで、本当に人が集まるのだろうか、予算の収支は大丈夫だろうか、など色々な心配もあったが、最終的には約 100 名の参加者が集まり、手弁当で参加していただいた素晴らしい講師陣にも恵まれ、とても良い研究会になった（図 1）。この時に、世話人として個人的にこだわったのが合宿形式である。日本版ゴードン会議を目指して、食事やお風呂、宿泊部屋においても、ずっとリズム研究の話をする。これは、学会の年会参加ではなかなか得られないレベルの仲間意識が芽生えるきっかけとなり得ると考えている。合宿形式を維持することは世話人にとってかなりな負担となるのだが、ぜひ、継続して欲しいと思う。また、若手の会の一つの特徴となっているのがグループディスカッションである。少人数のグループに分かれて短い時間で全員が研究発表を行い、互い



図 1 第一回 若手の会@見見川の集合写真

✉ stane@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

に質問や相談をする。形式的な質問ではなく、時には本当のダメ出しのようなコメントまで出る。研究室のセミナーのようなスタイルで日本のリズム業界が一体となる場になれば良いと思っている。

個人的には大満足であった生物リズム夏の学校だったが、多方面からも良い評判が耳に届き、また継続して研究会を開いて欲しいという要望もあり、2011年の夏には「生物リズム若手研究者の集い2011」を開催した。夏の学校、という単語が、リズム初心者のためのレクチャーのような印象になってしまうため、もう少し上のステージの研究者を対象に、将来の生物リズム研究について議論する場になれば良いという思いを込めた改名であった。研究のブレイクスルーには異分野の融合、いや人と人との出会いが重要だと思う。一人の研究者が特定の領域のスペシャリストになり、その領域をさらに押し広げようと思った場合、時に、研究の大きなブレイクスルーは研究室の外で生まれる。異分野のスペシャリストとの雑談の中で、または少し離れた分野の論文に出会うことが大きなきっかけとなる。生物リズム、たったこれだけのキーワードで集まった多方面の研究者が互いの研究成果について議論し合い、将来ビジョンを見つける場になってくれることを祈っている。この第2回の若手会において実は一番深く印象に残っているのが合宿所の下見である。第2回の若手会は岡山県で開催したが、その現場確認のために世話人6名（吉種、伊藤、西出の3名に加えて、池上啓介さん、藤原すみれさん、瀧側太郎さん）が合宿所に集結した。ほぼ初対面のメンバーもいたため、自己紹介と現場検証も兼ねて、実際の会場で6名の世話人による講演会を開催した。質疑込みで一人30分程度の予定に対して、みんなの質問ラッシュが止まらず大延長。ほぼ2倍の時間をかけても最後

まで終わらない、とても白熱した現場検証となった。本当はいつも気になっていた本音の質問を同世代でぶつけ合うとても有意義な時間であり、ここでまた、出会いの場の重要性を再認識した。未来の世話人たちにはぜひ、この現場検証を推奨する。若手の会当日のより細やかな対応が可能となることに加えて、世話人の一体感とお互いへのリスペクトが生まれるだろう。

私は2年間の世話人で引退したが、その後、小野大輔さん、中畑泰和さん、村山依子さん、大出晃士さん、池上太郎さん、伊藤照悟さん、土谷佳樹さん、久保田茜さん、畠山哲央さん、武方宏樹さん、楠瀬直喜さん、小林久美子さん、小田昌幸さん、板木大知さん、遠藤求さん、村中智明さん、佐藤美穂さん、吉田雄介さん、石川聖人さん、升本宏平さん、新田梢さん、平野有沙さん、中根右介さん、関元秀さん、と世話人のバトンをつないで、2018年の冬には第9回となる若手の会が日本睡眠学会冬の学校との合同という形式で開催された。次回は記念すべき第10回大会となる。また、2010年の夏からカウントすると2020年の夏で10周年を迎える。何かアニバーサリー企画ができないかと考えているのだが、もはや10年経って、同世代の悩みはラボ運営や研究費獲得などステージが一つ上がり、世話人経験者も豪華な顔ぶれになってきたのではないだろうか。若手の会は10年前の我々と悩みを共有する世代に託し、生物リズム「ミドル」の会を設立する時期が来たのかもしれない。例えば、若手の会の世話人や講師を経験した人だけが限定で参加できる、岡山の現場検証のような研究会が開催できないだろうか。吉種、伊藤、西出の3名に遠藤さんを加えた4名で、現在、ミドルの会の構想中である。これぞというアイデアをお持ちの方はぜひ、お声掛けいただきたい。